会報

有田史談会
事務局
佐賀県西松浦郡有田町上幸平1-8-5
TEL　090-4740-4752
HP　arita-sidankai.sub.jp/
arita-sidankai@hotmail.com

大橋先生の講座開催を再度延期！

本年一月下旬、二年振りとなる大橋先生の講座がようやく実現の運びとなり、一月一日付の史談会通信に掲載して会員へ喜びのお知らせをしたのも束の間、年末から新型コロナウイルスオミクロン株が全国各地で急速に増え始めたため止む無く講座開催を断念しました。　大橋先生からは「江戸期における肥前磁器の開発過程で果たした金ヶ江三兵衛集団の役割について」との表題で二十一日に講演を頂く予定でしたが、急遽取り止めの連絡を取りました。

2022.1.1発行の史談会通信

なお、講演予定の内容については昨年八月二十二日多久市中央公民館にて講演された「高麗谷窯跡の秘密を探る」のダイジェスト版で講演頂く予定でした。参加されている方も数名ありますが、多久市郷土資料館にて図録を入手し配布予定です。

また、二月二十日に予定していた名護屋城博物館での家田館長による歴史講座「国交回復以後の日朝陶磁器交流」も現状では中止せざるを得なくなりました。コロナの終息後に改めて計画の再検討を行いたいと思います。

6月–'22 3月
なごや歴史講座
名護屋城跡並びに陣跡、日本列島と朝鮮半島の交流史、唐津・東松浦地方の歴史や文化などをテーマに、学芸員がお話しします。
※原則第3日曜日（8月は第4日曜日）
※事前申込不要
※参加無料
※ホームページでご確認ください

名護屋城博物館の歴史講座

次年度の活動について

コロナ禍で、一昨年度に続き本年度も活動は全面的に中止せざるを得なくなり、会員の皆様と会えずじまいの一年になろうとしています。

毎月一度の例会や例年年度初めに行っていた食事会も出来ないまま、二年が過ぎました。皆様へ毎月お届けしている「史談会通信」の発送だけで、何とかつながっているものの、寂しいかぎりですがやむを得ないことと諦めています。

さて、四月から新年度が始まりますが依然としてコロナの感染拡大が続いており、活動の再開見込みは立ちません。コロナの終息の目途が立たたず、活動再開までまだまだ時間がかかりそうです。

よって、次年度は**会費の徴収は行わない**ことになりました。当面は毎月の史談会通信の発行と、会報の発行だけを継続いたします。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

新年度については、各自で研究テーマを設けて、楽しみながら活動をお願いいたします。

ちなみに、井手邦男さんは二年前から「神社巡り」を継続しておられ、鶴美百合さんはキーワードをクロスからハートに変えて独自の調査・研究に励んでおられます。活動テーマは自由ですが、無理をせず楽しい活動になることを祈ります。

また、昨年に引き続き七月に会報発行を予定しています。七月に向けて皆様の活動がより充実するよう期待しています。

2021年度 活動報告

4月	史談会通信
5月	史談会通信
6月	史談会通信
7月	史談会通信 会報7月増刊号
8月	史談会通信
9月	史談会通信
10月	史談会通信
11月	史談会通信
12月	史談会通信
1月	史談会通信
2月	史談会通信 会報
3月	史談会通信（予定）

◆本年度は毎月の史談会通信を発行し、会報は例年２月の発行に加え、７月増刊号を発行しました。
◆史談会通信へも、研究発表や近況報告など皆様の投稿をお待ちしています。

神社巡り

井手邦男

有田の陶山神社に磁器の狛犬が寄贈されてありますが、私は今回淀姫神社参拝を兼ねて見学に行きました。その時に鳥居をくぐって左右に大きな、コバルトの釉をかけたブルーのしゃちほこが二体ありました。それから三の鳥居を進んで行くと、陶器の阿吽の形をした狛犬がありました。一体は角が付いた狛犬で、対になるもう一体は角がない狛犬でした。有田の陶山神社以外の陶器の狛犬で、こんなにも大きなものが作れるものかと関心ました。石段を上がり社殿で参拝を終わり、社殿の周囲をよく見ると本殿の幕に三つ巴が付いていました。社殿の右に丸に梶の葉、左に丸に梅鉢の紋が入っていました。その時なぜここに梶の葉の紋が入っているのか？？と思いました。よく考えると松浦党の本家の家紋でした。

この淀姫神社は、江戸時代天領の地で、当時肥前国西松浦郡、現在の大川野町にあります。

金網で保護された「しゃちほこ」

淀姫神社の三の鳥居にある狛犬

淀姫神社の由来

第二十九代　欽明天皇の御代二十四年（五六三年）に鎮座されたと伝えられています。

古くは河上大明神と称され末羅県鎮守の霊場と謳われました。興止日女命を主祭神とし、後世に武御名方命と菅原道真公の二柱を勧請しています。明治五年（一八七二年）、社格制定の際に郷社に列せられ、淀姫神社と改称されました。

御社殿

文明七年（一四七五年）領主・源治が社殿を再興し、天生十七年（一五八九年）波田三河守親が社殿を修造（勅礼現在）、明暦二年（一六五六年）・享保三年（一七一九年）に社殿を改修、宝暦九年（一七五九年）社殿を銅板葺として現在に至ります。

—淀姫神社御由緒より—

筋金入りのメダカ愛好家

鶴　一樹

ここでようやく梶の葉の紋用が出てきた疑問がこの説明を読んで納得できました。波田氏は松浦党と深く関係があります。

昨年から神社巡りを続けていますが、皆さんも時間があれば淀姫神社へ参拝されて、歴史深い神社を見ていただければと思います。

陶器の狛犬

きれいな透き通った水の中を、白、赤、黒、まだら、ラメ入りなどの色とりどりのメダカが自由に元気にスイスイ泳いでいる。自分だけのプライベートメダカ、カワイイ！　至福の刻、癒される。一日に二回、三回と見に行く。

今年はまあうまく育てられた。去年は飼い方が我流で、なってなかったので夏場に全滅した。また買ったが、ほとんど死なせてしまった。フンが水底で腐ってヘドロとなって、メダカに悪い影響を与えたのだ。

今年は大反省して、ユーチューブなど動画を参考にしてメダ活。毎日フンをスポイトで取ったり、メダカの入ったタライの水を全部換えたり、水をいい状態に保つことやタライは大き目で深めが良いことなど学習した。夏は昼間の暑い盛りは避けて、夕方二時間ぐらい汗だくでメダカの世話。七〇歳のじいさんは、生きがいを見つけた。毎日楽しい。

今の時期、メダカは冬眠した状態。寒いと体が動かない。水底でじっと体力を保っている。　来たる春までサヨウナラ。　保温のため、板とかビニールシートで覆っている。

越冬メダカ頑張ってくれ!!

牧島山と私

坂井勝也

私は、小・中・高時代を伊万里市瀬戸町の牧島山で過ごしました。

私のふる里「牧島山」は文献等には次のように記されています。

牧島山は伊万里湾に面していて、湾側の西半分は麓から頂上まで玄武岩で覆われていて、江戸時代初期までは、牧島山が伊万里湾に浮かぶ島であったが、干拓によって現在の瀬戸町と陸続きになった。（楠久津と牧島山が橋でつながっています）

この島は古く楠久島と呼ばれていたが、元和八年（一六二二年）佐賀藩主鍋島勝茂が、この島が牧場として好適地であることを察し、同九年に馬を放牧したが失敗に終わり、後に中野神右衛門を奉行に命じ二十頭を放牧させ、これにちなんで牧島と呼ぶようになった。（牧島山には現在でも馬追の石塁が残っています。）

牧島山の思い出について記憶を辿ると、我が家は台湾からの引き揚げで、当時は食べることが第一で、親類の勧めで元海軍用地であった「牧島山」に開拓団の一員として入植しました。戦時中は、牧島山の頂上には高射砲陣地があり、私が住んでいた家は高射砲陣地に電気を送るための発電所建屋跡で、高射砲は終戦と同時に爆破したと聞いています。

朝、自宅の窓を開けると伊万里湾と釘島、七ツ島が見え、素晴らしい風景でした。百メートルほど山を下りると遠浅の砂浜があり、タツノオトシゴや天然記念物のカブトガニが沢山いました。楠久側の海岸ではナマコやチャーラギ（平貝）が沢山獲れていました。

牧島山の登り口には、四国の阿波の船団基地があり、魚市場は賑わっていたのを思い出します。周りには造船所や映画館、病院、銀行、パチンコ店などがあり活気に満ちておりました。その頃は電気がなく、小・中・高を通じてランプ生活でした。

作物は麦、イモ類、西瓜、葉タバコなどが中心でした。肉はミーという名前の猫が獲ってくる山ウサギが御馳走でした。魚は漁師との物々交換でした。

小学校までは一時間半ほどかかって通学しておりました。生活は貧乏のどん底でしたが土地の方は親切で、昔のことが昨日のことのように目に浮かんできます。

楠久（手前）と牧島山

肥前のやきものの魅力

山口信行

佐賀の焼きものとなると、現在製造されているものも含むこととなるので、敢えて肥前の焼きものと題目を記したのは、この地域が肥前と呼ばれていた頃の焼きものを暗に指すからではあるが、それにしても自分は近世のあけぼのの、この地域の焼きものがなんと好きなもるのかと、つくづく自分で呆れることがある。要するに卑近に云えば、古唐津が好きで、初期伊万里（初期有田）が好きで、古伊万里（古有田）が好きで、鍋島が好きなのである。

好きなので、つい触手が伸びるわけでもあるが、一般に古いものは値が張るので、そういうものにはしょっちゅうは手を出せない。だが、どんなに大きなキズがあってもその時代の本物が欲しくなることがあるのである。それゆえ、貧弱な自分の蒐集の中には、何個真っ二つに割れていて接いであるものがあることか。

そういう次第なので、云わゆる今ものの焼きものにはまったく興味が湧かない。よく周りの方が、この器、きれいね～、すごく細密に画かれているね～、とかおっしゃったとき（もちろん現代作品です）、なるほど凄いナとは思うけれども残念ながら欲しいなとは思わない。もろに興味がないとかを顔に出せばいろいろ面倒にも思うので、そうね～、とか相槌を打つわけではある。けれども、まったく買えないが、唯一今ものでも欲しいと思うのが全くないわけではない。それは、十三代や十四代の今右衛門さんの作品類である。自分でもよく分からない。心惹かれれるのがどこからくるのか、説明は難しいけれども、どこか近世に通じるのがあるからだろうかとも思っている。もちろん、保持は出来ていないが・・。

目下の私の関心事といえば、有田という町のもつ歴史と、そこに残る文化的遺産の凄さのＰＲと、古伊万里等を中心にした肥前の焼きものぐらいしかないので、そのあたりをつれづれに記してみたい。先については観光ガイドとして、微力ながらの発信の場を別に求めるとして、肥前のやきものについては、自分にとってその魅力がいったいどこから来るのか、まったくの独断と偏見の素人目線で、少しずつ自由に書いていけたらと思っている。でもそれで自己満足してるので、全然よいわけではあろう。

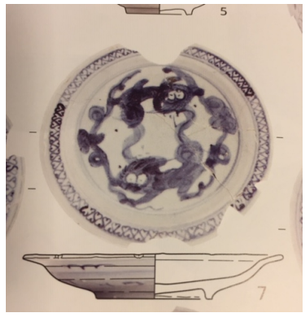
秘められたハート繋の謎

鶴美百合

有田では、長年に渡り有田や古九谷論が語り続けられてきました。いまだ有田陶磁の起源には、なぞが多いと思われます。特に有田は一つ二つの真実が、いやもっとなにか隠されているのではないだろうか？と思いながら、日々、古い本でなにか手がかりになるようなものはないかと探すのが、現在の私の唯一の楽しみです。

さて、覚えている方もいらっしゃるかもしれませんが、ちょっと前までは、私はやきものに描かれているクロス文の謎に夢中でした。しかし、現在はクロス（十字）からハートに移行しています。ちょっとは成長したのでは？と思っています。

さて、私が皿の縁（はしっこ）口縁部のところに巡っている「ハートつなぎ」の謎？のきっかけとなったのは、山辺田遺跡から出土した染付小獅子文小皿でした。



染付小獅子文小皿ー山辺田遺跡
（歴史民俗資料館蔵）

出土したのは寛永十八年（一六四一）の染付銘の染付瓶と同じ土壌から出土したとあった皿です。その皿は、最初見込みに描かれている不思議な三獅子の目が〝ぎょろっ〟としているので、そちらの方に目が行き、皿の縁に巡っているハートつなぎには目がいきませんでしたが、それもそのはず、「そのハートつなぎ」の役目とは、見込みに描かれている獅子皿をぐるっと囲み、三ギョロメ獅子をパリッとメリハリを与えて引き締める装飾的縁取りdecorative border（ボーダー）の役だからです。まあ脇役といっていいのかもしれません。

そこで、寛永時代になぜ？染付の「ハートつなぎ」を縁取りに使ったのだろう？と私は不思議に思いました。なにか、この縁取りに込められた思いがあるのではないか？と思ったのです。しかし、いままで「ハートつなぎ」に関してはなにも語られるもこともなく、資料もインターネットで検索してもなにもでてこない超レアものなのだと気がつきました。ですので「ハートつなぎ」の縁取り関してはどうも、日の目を見ないまま今日まできたようです。その一方、文様帯の区切りには、初期伊万里の如意頭、雷文、七宝つなぎ文四方襷（よもだすき）文、連弁文はよく目にする文様帯です。

さて、急に文様帯といってもピンと来ない方に、身近な例で言えば、ラーメン鉢の縁にめぐらされている四角い渦巻き模様ではないでしょうか。雷文というそうですが、由来を調べましたら圧倒的に魔除けの意味と書かれてありました。実は、意外なことに、雷文に近い模様は西洋にも存在し、メアンダー（meander）といわれメアンダー川という蛇行した川と由来にあるとありました。意味するところは、すなわち「永遠に続く絆」symbolized infinity and unity と私は解釈いたしました。

ルネサンス期の絵画「アテナイの学堂」には「ギリシア雷文」などと呼ばれる模様があり、アーチの柱に描かれているそうです。あのラーメン鉢の雷文がローマ、パリの建築物やギリシャの調度品の縁に取り込まれているとは、いやはや、ラーメン鉢の雷文ってインターナショナルなんですね。そうそう、雷文のラーメン鉢を手がけたのは、九谷の石川県九谷村（現在は久谷町）が発祥の磁器だとか、そうだ！今度は、有田と九谷で「ハートつなぎ」のラーメン鉢の文様帯を作ったら話題を呼びそうですがいかがでしょうか？

さて、山辺田の獅子皿の「ハートつなぎ」発見の後、令和二年夏の、村上先生の著書　伊万里磁器の創始窯「小溝窯出土陶片」が出版されました。本には、多数の「ハートつなぎ」の陶片の写真が目にとびこんできました。

小溝の陶工達が初期伊万里の皿に施した文様やデザインは、山辺田にくらべると、洗練された文様やデザインのように思われます。

小溝窯出土陶片

はたして、往時の陶工はこの「ハートつなぎ」の示す意図を知って描いていたのか？　それにしてもだれがこのようなデザインを考案したのだろうか？　発注者はキリシタン大名？　内藤ジョアン様？いや、はたまた、有田にゆかりが深い、加賀藩前田家か？とますます謎は深まりました。

次に「ハートつなぎ」を発見したのは、昨年の秋です。前回の会報七月増刊号の紙面に載せていますが、伊万里・鍋島ギャラリーの展示に「青磁染付桜文皿」の展示品がります。

その小皿の高台外側面に「ハート染付の連続文様」が巡らされています。お皿の絵柄は、桜と流水でとても可憐な小皿です。そこで、鍋島の高台側面に「ハートつなぎ」がありますか？と尋ねたところ、あれはハートではありませんよ。「猪の目」（いのししの目）ですという説明を受けたという訳です。後に調べたところ、猪の目は魔除けの意味があり、古来から神社仏閣にあるとありました。

青磁染付桜文皿（部分）

さて、いよいよ、今回の目玉！「ハートつなぎ」大発見！につながります！ここフィナーレを飾るにふさわしい逸品です。いままでは、染付の「ハートつなぎ」を観てきましたが、これが、な、な、なんと、「色絵」の「ハートつなぎ」なのです！「あんた、どこでみつけたとね？」って声が聞こえますが、はい、それは、有田図書館所蔵の日本のやきもの3、文：永竹威氏の本でした。

これを見たときは、ええ？色絵のハート？！ハートに突然、赤い色？凄すぎます！驚きです。いままで、染付のハートしか見ていなかっただけになおさらです。

そこで、確信しました。この「ハートつなぎ」文は聖書でいう、「アガペーの愛」ではないのかと。ハート、すなわち人と人を結ぶ、友情、絆がありますが、それが永遠に続くようにと願いが込められた文様ではないかと。そこで、私はこの赤絵の壺のハートつなぎの永竹先生の説明文を読んでやっぱりそうかと思ったのが次の記述です。

「色絵、岩牡丹図壺　江戸前期　有田南川原山　柿右衛門系　高さ 23.2 口径　10.7 胴径 18.9　典型的な柿右衛門様式の岩牡丹図で、やや、複雑な模様構成である。彩絵は、呉須赤絵調である。蓋付の沈香壺の形状で、西欧向けの作調である。」と結ばれていました。

「色絵岩牡丹図壺」
江戸前期
有田南川原山
柿右衛門系

それにしても、苛酷な江戸時代の禁教下によく耐えて今日まで生き永らえてきたものだと思います。このさりげないハートつなぎの縁取り（ボーダー）が目立たなかったこそ、今日私達が見ることができたのかもしれません。そのおかげで、この「ハートつながりの帯」が江戸時代から令和四年の私達までつながっていて、これからも永遠にこのハート（愛）が続くのでしょう。

先生の説明文でもおわかりのように、西欧向けというのは、この文様はハートという意図で文様帯として描かれたということだと確信しました。

さて、最後の最後に「ハートつなぎ」をもっと見たいと思われているのではないでしょうか？リクエストにふさわしいのを再発見いたしました。それは、ドレスデン国立美術館に所蔵されているものです。

どうぞごゆっくりドレスデンの壺をご鑑賞ください。

それでは、史談会のみなさま今年もどうぞよろしくお願いいたします。

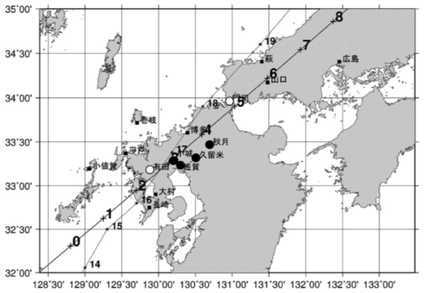
ドレスデン国立美術館所蔵

大正十四年の地区の火災について

大串和夫

昨年の夏、私の地区の方から、「古い地区の書類を処分したい」との相談があり、書類を頂きました。この中に大正・昭和時代の地区の財産（祭田など）に関する書類等の他に、火災の罹災記録に関する書類がありました。有田は歴史上大火災があり、皆様ご存知の文政十一年八月九日（旧暦）の大火です。この時、九州地方は大暴風雨（台風）に襲われ、その年が戊子の年であったことから「子（ね）年の大風」または「シーボルト台風」とも呼ばれています。当時、有田皿山の焼失家屋は約八五〇軒で死者も四～五〇人あり、皿山千軒と呼ばれた場所で焼け残ったのは一五〇軒あまりであったとのことです。

シーボルト台風の北部九州の経路



「小西達男；1828 年シーボルト台風と高潮」より

さて、外尾山の火災は大正十四年九月十二日午前二時頃に出火しました。罹災したのは住家が六軒、空き家が一軒の合計七軒です。（名前なども記載されていますが省略）

この火災で、消防組の一人が骨折し、重傷を負っています。当時は出火に伴う義損金が有田村内、各地区から集められています。

内訳は、

境野	五四円五〇銭
古木場	三〇円二〇銭
北戸矢	三四円六〇銭
南戸矢	六六円一〇銭
桑古場	一〇六円
戸杓	九七円一〇銭
東外尾	九四円五〇銭
西外尾	六〇円五〇銭
丸尾	一〇〇円
黒牟田	二一九円
応法	九四円
宿（本町）	一九八円
外尾山	四五〇円
その他	四三〇円
合計で二千百一円四五銭です。	

因みに、大正一四年当時の米一俵（六〇キロ）の価格が一六円二三銭しているので、現在のお金に換算すると約二百三十六万円になります。

当時の世相は、大正後期から昭和前期にかけての大不況の厳しい時代にもかかわらず、村民の皆様が義損金を支出され困窮者を助けておられます。当時の記録によれば、平均額・被害の程度・生活状態を勘案して義損金を配付されており、災害を被った人を助けるという習慣がありました。

なお、火災のあった場所は、藤巻製陶所前の通称「産業道路」から外尾山ロータリーにかけての道路部分です。

昨今、地震などの自然災害や火災など頻発しており、取り上げました。

【参考文献】
有田町史通史編

天照大神宮と天神様

前田順三

本町の外尾神社（ふげんさん）には、「天照大神宮」と「天神様（菅原道真像）」の二つの御神体があり、「天照大神宮」は太陽神を、そして「天神様」は雷神すなわち雨の神様をお祀りしているものと思われる。

「天神様・天満宮」と言えば菅原道真公ということで、多くの人が学問の神というものを最初に連想すると思われるが、もともと天神・雷神信仰というものがあり、雷神はその音、光等の様相から畏怖の対象として庶民から崇められてきた。

また、雷は雨をもたらす。日の光とともに農耕には絶対的なものである。「稲妻（いなずま）」は現在「妻」の字を書くが、元来は「夫」の字を書いたと考える。「つま」は配偶者の一方の異性で夫婦の一方の名称であり、「夫」「妻」と書いて「つま」と読ませ、万葉集などにもよく出てくる。その「稲夫」であるが、稲の結実期に良く発生し、その雷光が稲を妊娠させ、実るものと考えられていた。実際雷が多い年は豊作と言われてきた。

そのような昔からの雷神信仰と、菅原道真が死後雷神と化した怨霊信仰とが結びついたものと考えられ、その雷神を具現化したものとして菅原道真像が祀られるようになったと思われる。太陽神と雷神、まさに外尾神社の鳥居に刻んである「風雨順時禾穀豊穣」の祈りである。

「禾」とは「稲」のことであり、よく「五穀豊穣」とはいうが、実際には稲作が大半であったであろうから「禾穀豊穣」（かこくほうじょう）が率直な表現であろう。

戸杓の天満宮においても社殿のすぐ背後の上段に「天照大神宮」を祀ってあるし、丸尾の「観音さん」も本町の外尾神社と全く同じような形式で、左奥に「天照皇大神宮」と「天神様」が祀ってある。大野は逆に神社の扁額は「大神宮」となっていて、奥に天神様をお祀りしてある。

また、社殿の前には天神様の使い

である大きな牛が狛犬の如く対にして置かれている。外尾町の椎谷神社も、本殿より手前の鳥居より入ったすぐ右の所に天満宮と天照皇大神宮をお祀りしてあるし、外尾山の八幡さんも社殿の裏に「大（太？）神宮」と「天神様」をお祀りしてある。

外尾神社　天神様

外尾神社　天照大神宮

台座に「安永五　申」　（安永５年　１７７６年）

独り言

中村貞光

四十歳半ばまで薬局経営だけに没頭し、何の趣味も持たず仕事だけに生きてきた私は「文章を書く」ことが大の苦手だった。未だ文章力は上達しないが、文章を書くこと自体はそれほど苦にならなくなった。もっとも日記程度の文章でも、若い頃に比べれば大いなる進歩で、これにも転機がある。

当時、私の仕事場である薬局の隣に鰻屋があったが、その鰻屋が廃業し代わりに古本屋が出店してきた。丁度四十歳半ばの事である。若い頃、山岡荘八著の徳川家康全二十六巻を読んだことがあるだけで、読書にほとんど興味がなかった私が、たまたま司馬遼太郎の「竜馬がゆく」に出会い、読書の楽しさに目覚め「坂の上の雲」「翔ぶが如く」「菜の花の沖」など数作品を一気に読んだ。北方謙三のハードボイルド小説には一時期はまってしまい作品に登場するバーボン（ワイルドターキー）を飲みながら深夜の読書に耽った。女性の心理描写が巧みな渡辺淳一の小説もかなりの作品を読んだが、なかでも野口英世の伝記小説「遠き落日」や乃木希典夫妻の生涯を描いた「静寂の声」が印象に残っている。

中でも「無影燈」は医師としての実経験が盛り込まれた作品で特に印象深く記憶に新しい。

この頃は、本業の薬局での仕事はバブル崩壊後でのんびりする時間が増えていて、相談机の上には常時五～十冊の本を積んで、毎日二～三冊の本を並行して読んでいた。　数年間はジャンルを超えて年に二～三百冊を読んでいたので、本を読むことで自然と文章を書くことに慣れていった気がする。振り返れば乱読に近い読書が大いに役立っている。

若い頃からメカ音痴だった私は、パソコンを購入したものの触ることが怖くて一年間も放置していた。一念発起してからは同窓会の会報作りやホームページ作りに挑戦してきた。文字入力の練習を兼ね、自分史「軌跡」を書き始め現在も続いている。

初めての海外旅行はA4版33ページの旅行記として書き残し、網膜剥離で三週間の入院をした時はA4版14ページ、四年前の肋骨骨折はB5版34ページの入院記録になった。

目からウロコ

吉永　登

前回は、幻の「初源伊万里」について古美術誌「目の眼」を参考にしながら紹介したが、今回も同誌二月号に掲載された勝見充男氏の興味深いコラムに出くわした。

タイトルは「辰砂のクルス文」で十字文の美しい小壺の写真に釘づけになった。それは勝見氏があるコレクターから譲り受けた物で、掌にすっぽりと収まるような初期伊万里の小壺である。

野田敏夫著『古伊万里探求』で、「辰砂菖蒲文小壺」と紹介されていたが、勝見氏はそれに違和感を憶えて次のように反論している。

「確かに菖蒲と言えないこともないが、あまりにも不自然なデザイン。これは十字架（クルス文）ではないか。いわゆるキリシタン物の一つで

「辰砂十文字壺」・「辰砂菖蒲文小壺」

はないかと感じたのだ。江戸期の伊万里焼のなかに、クルス文など潜ませた〝隠れキリシタン伊万里〟なるものが存在することは昔から指摘されている。」と述べている。

さらに最初の所蔵者だった前田久子氏の『偲ばゆ伊万里』には「辰砂十文字壺」とあり、おそらくこちらの方が実像に近いのだろうと思われた。」と記している。コレクターによると、発掘されたのは百間窯（山内町宮野板ノ川内）で、発掘された年代も見つけた人も分かっているという。

そして、「これを造った陶工がキリシタンだったのか、特別な注文品だったのかは判らない。ただ、焼成の不具合か、背面に釉の荒れた部分が生じて物原に廃棄されたのだろう。」と述べている。

有田皿山とキリシタンについては鶴美百合さんが精力的に調査研究を続けていて、史談会会報でも何回か文献や製品を紹介している。

それによるとキリシタン禁教令が出される前は、鍋島藩と宣教師たちは親しい関係にあり、鹿島を中心にいくつかの南蛮寺（教会や修道院）が建てられており、肥前の陶工たちの中にもキリシタン信者がいたことは十分に考えられる。禁教令発布後は、キリシタン関連の製品はほとんど破砕され消滅したものと思われる。

長崎の潜伏キリシタン関連遺産がユネスコの世界文化遺産に登録されている現在、肥前窯業圏として佐賀県も歴史的遺産の発見と保存に取り組むべき段階に来ているのではないだろうか。

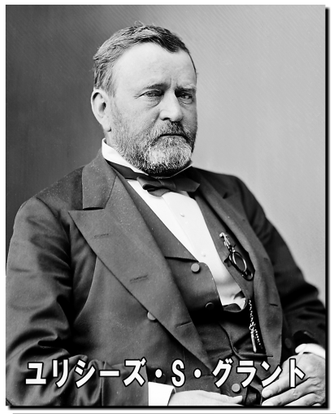
グラント将軍の幻の有田訪問

馬場正明

グラント将軍はアメリカ南北戦争時の北軍の将軍で、第十八代のアメリカ大統領（一八六九～一八七七）で、ユリシーズ・シンプソン・グラントが正式名で、アメリカ史上初の陸軍士官出身の大統領です。

グラント将軍は、大統領の任期を終えたあと、船でヨーロッパから中東、アジアと廻り、清国、日本へ訪れました。この時の東京での一場面が昨年の大河ドラマ「晴天を衝け」で放映されました。

日本訪問は明治十二年（一八七九）



六月～九月に、当初長崎、伊万里、皿山（有田）、兵庫（大阪・京都）、静岡、横浜（東京・日光）などを計画されていましたが、当時西日本ではコレラが流行しており（西南戦争の帰還兵が全国に広めた）、「流行病有之地は一切罷越すと…」と言うことで、伊万里、兵庫での上陸はなく有田への訪問はなくなり、幻の有田訪問になりました。ただ準備はされていて、そのことが以下の文面からわかります。

一、明治十二年（一八七九）五月　西松浦郡長はグラント将軍一行が松島搦で上陸、伊万里から大木村をへて皿山までの道中、道路の破損、橋梁の墜落などは修繕するように戸長へ指示、道路は整備された。特に従来通行していた渡河の飛石に替え、前年新設された橋では橋の取り付け道路が必要となり、この道路が人力車通行に支障があるため道幅を拡げる工事が行われた。ただ、道路拡張に伴う潰地（つぶれち）の借地はその後も永く引き継がれました。「グランド補い」（二里町誌より）

二、グラント将軍が有田を訪れるというので石場の勤番所を新築　饗応のため（有田町史陶業編）

三、田代家文書の中の「明治十二年各地へ遣わす手紙控え」には、有田に居た助作の義兄安吉が長崎に居る助作に有田の状況を次のように知らせています。

「四月二十日午前十一時深川栄左衛門が外務省官吏三名を案内、西洋館を見物に来た。後で尋ねると『アメリカ前大統領夫妻遊行のついで伊万里、有田に来る噂で、旅館を見積るために来たとのこと』昨今の報せでは本月末までには各地へ来る噂で、饗応役は佐賀、土佐の知事で両所より内々に深川へ依頼状が来て同所に宿が定まった模様で大金を費やし造作をしている」とあります。

昨年の東京オリンピックと同様に感染症の拡大で当初の計画が変更されたのです。感染症の怖さを実感しました。

あとがき

本年度も昨年に続き活動自粛を継続したままで一年が終わろうとしていますが、今年も「会報」発行が予定通り完了し、何とか史談会の体面を保つことが出来ました。毎年、正月明け直後から「会報」作りに追われますが、今回も無事編集作業を終えることができ、会員皆様のご協力のおかげと感謝しています。